

## 『選擇集』と『逆修說法』

兼 岩 和 広

### 〔抄録〕

本稿は『選擇集』の第一章から第三章までを草稿本とされる「廬山寺本」を踏まえながら『逆修說法』と比較検討し、『選擇集』の成立について考えるものである。『選擇集』は兼実の要請や当時の他宗への配慮も含めた上での構成で出来ており、法然の教義的遺文の中でも最も優れたものとされるが、少なくとも第一章から第三章に関しては『逆修說法』を参照して執筆されたことが明かである。しかし、この対応の有無に従って「廬

山寺本」の執筆状況は様々な訂正を伝承している。それらの訂正を考察することによって第一筆とされる安樂房が第二筆真觀房に交替する理由も含め、それらの章の執筆状況を考えながら『選擇集』の成立を明らかにする。

キーワード…『選擇集』、「廬山寺本」、『逆修說法』、安樂房、真觀

房

法然教学の原点となる法然自身の思想を研究するに当たり、その最も重要な資料となるのが「三部経釈」・『逆修說法』・『選擇集』の三つの教義的な遺文である。これらについては既に多くの研究成果があげられ、さらに多くの研究が続いているが、その殆どは先学の研究を背景とした結論を導き出すことに終始する所謂「思想先行型」の論致に留まっているような気がする。この「思想先行型」の論致が生む

学問的停滞を打破するためには、まず原典批判と原典解釈を行う本来の文献学に立ち戻り、それぞれの遺文について新たな角度から再検討、再確認すべきである。その結果が総合されて初めて法然自身の思想という大きな問題を解明するための方向性が導き出されると考える。現在筆者は『選擇集』の草稿である「廬山寺本」を加えることによって『選擇集』の執筆がどのように『逆修說法』と関わっているかを再検

討しているが、本稿ではまず安樂房の筆とされる第一章から第三章を考察し、法然の思想研究の資料としたい。

## 『選擇集』第一章と『逆修說法』

『選擇集』第一章は浄土宗の教判を順序立てて述べたものである。今、その内容を確認すると、

- ① 安樂集の引用 聖道浄土の二門を明かす。
- ② 立教の不同を明かす。
- ③ 浄土宗名の証拠を明かす。
- ④ 聖道門について明かす。
- ⑤ 浄土門について明かす。（三經一論の事）
- ⑥ 聖道を捨て浄土に入らしむる事を明かす。
- ⑦ 師資相承を明かす。

という構成になっている。「廬山寺本」では⑦「師資相承を明かす」の段落が全て後の挿入となっていることをはじめとして、その他にも細かな異同がいくつか存在する。その中でも注目すべきものとして、第五丁表の七行目に見られる線で囲まれた部分が挙げられる。そこには

之外加供養也 日集 次往生浄土

という記述がみられる。この文章は第一章の④「聖道門について明かす」の段落の最後と⑤「浄土門について明かす（三經一論の事）」の段落の文頭にあたる。その間に記された線で囲まれた部分は、後の『選擇集』では単なる間違いとして削除されており、これまで注目されることはなかった。もちろんこの部分をそのまま「此の集の中に聖を立つ」と読んでも意味をなさない。むしろこの文章からすれば「此の集の中に聖道浄土二門を立つ」と記そうとしたと考えた方が自然である。つまりは⑥「聖道を捨て浄土に入らしむ事を明かす」の段落の冒頭に來る文章を念頭に置いていたと考えられる。すなわち初めは⑤を飛ばして⑥を記そうとした形跡を残しているのである。

そこでこの第一章の内容に従って『逆修說法』の中に一致する部分を探し出してみると、具体的な平行文は見出せないものの、内容的に一致する文章はほぼ全体にわたって見出せる。以下に前掲の第一章の内容に対して、その対応箇所を記しておく。<sup>4</sup>

### 『選擇集』『逆修說法』

- |   |               |                        |
|---|---------------|------------------------|
| ① | 対応無し。         |                        |
| ② | 「六七日」 2—1     | 諸宗の立教開宗（昭法全 二七〇頁十行目）   |
| ③ | 「初七日」 5       | 宗の名を立つること（昭法全 二三六頁六行目） |
| ④ | 「六七日」 2—2—1—1 | 聖道浄土（昭法全 二七〇頁十二行目）     |
| ⑤ | 「初七日」 4       | 三部經（昭法全 二三五頁十六行目）      |
| ⑥ | 「六七日」 2—2—2   | 難易二道（昭法全 二七〇頁十四行目）     |
| ⑦ | 「初七日」 6       | 師資相承（昭法全 二三六頁九行目）      |

以上のように、①「安樂集の引用 聖道浄土の二門を明かす」の段落は『逆修説法』に対応箇所が見られないが、②から⑦の私積段全文については、「初七日」と「六七日」に内容的に一致するものが見出せる。これを踏まえて、「廬山寺本」第五丁表に見られる筆記間違いを『逆修説法』によって確認すると、

④「聖道門について明かす」と対応する『逆修説法』

(「六七日」 2—2—1—1 聖道浄土)

初聖道門者三乘一乘得道也即於此娑婆世界斷惑開悟之道也惣分有二謂大乘小乘聖道也別論者有四乘聖道謂聲聞乘緣覺乘菩薩乘佛乘也<sup>3</sup>

⑥「聖道を捨て浄土に入らしむる事を明かす」と対応する『逆修説法』

(「六七日」 2—2—2 難易二道)

立此二門者非道綽一師曇鸞法師引龍樹菩薩十住毘婆沙論立難行易行二道難行道如陸地步行易行道如乘船譬給立此二道不限曇鸞一師天台十疑論同引釋給又迦才浄土論同引其難行道者即聖道門也易行道者即浄土門也加之又慈恩大師云親逢聖化道悟三乘福薄因疎勸歸浄土云々此中三乘者即聖道門也浄土即浄土門也難行易行三乘浄土聖道浄土其言雖異其意皆同凡一代諸教不出此二門也<sup>5</sup>

このように『選擇集』の④と⑥の内容は『逆修説法』においてはほぼ連続して伝承されている。したがってここでは「廬山寺本」執筆時に

『逆修説法』の順序に従ったものを参照しながら筆記したと考えられる。すなわち④(「六七日」 2—2—1—1 聖道浄土)を筆記した時点で、本来は「初七日 4 三部經」に戻って、⑤に当たる部分を筆記しなければならないのに、誤ってそのまま⑥(「六七日」 2—2—2 難易二道)を続けて筆記したと思われる。そして「此集之中立聖」と記した時点で間違いに気づき、その部分を線で囲って見せ消した後、「初七日」に戻って「次往生浄土」と続けたと考えられるのである。すなわち「廬山寺本」第一章の執筆は『逆修説法』を中心として行われたと考えられる。

そこで、確認の為に「廬山寺本」に見られる他の異同についても見ていくことにする。「廬山寺本」第一章にはこの書写ミス以外にも、いくつかの書き込みが見られる。『選擇集』第一章の内容がほぼ全体を通して『逆修説法』と対応するが、文章を詳細に見ると、参照されたとと思われる『逆修説法』の文章と文章を繋ぐための増広が見られる。すなわち『選擇集』第一章の中に『逆修説法』と対応する部分と、必然的に増広された対応しない部分があるのである。対応する部分では「廬山寺本」の書き込みが非常に少ないが、逆に増広部分には執筆時に起こったであろう明かな筆記ミスが多く見られる。そのいくつかを例に挙げると、「廬山寺本」第五丁裏に

就<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>者<sup>ニ</sup>正<sup>レ</sup>明<sup>ニ</sup>性<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>浄<sup>ニ</sup>土<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>教<sup>ヲ</sup>

とあり、まず「正明」の三文字分が塗りつぶして削除されている。

この三文字目については途中までしか記されていないので確認することができないが、痕跡から「イ（ぎょうにんべん）」を記す途中であったと思われる。前の二文字については明らかに「正明」と記されていたことが分かる。さらにその右上には「一」の文字を挿入し、後に削除された跡が残っている。この三文字については、文章構造上初めは「・・・有正明往生浄土之教傍明往生浄土之教」と記そうとしたに違いない。しかし最終的に文を分けて「一者正明往生浄土之教、二者傍明往生浄土之教」と記すことになり、削除されたと考えられる。ただ、右上に「一」の文字が挿入され、さらに削除されていること、あるいは三文字の削除の筆の跡から考えると最終的な文章がまとまるまでに幾分かの時間がかかったと思われる。

ところでその前には「之」の文字が「此」に書き換えられている。この「此」と記すべき文字を「之」としてしまったミスは、口述筆記の場合に見られるものであり、文献書写の場合には起こり得ない。このような口述筆記で起こる間違いは他にも見られる。まず、第六丁裏に

ふまふま  
一由大智達まふ

とあり、「去」が後の挿入となっている。これは、訓読みで「大聖を去ること・・・」と口述されたものを書き手が漢文体で記す場合に起こす間違いである。同様に第九丁裏にも

順并  
賢逆應淨土

として「應」を見せ消ちし「於」を挿入する部分があるが、この箇所についても訓読みされたものを漢文体で口述筆記する場合に起こるミスであり、文献書写の場合には起こり得ない間違いである。

これらの用例を考えあわせると『逆修說法』と対応しない箇所、すなわち『逆修說法』に対応する文章間を連結する文章内で起こる筆記ミスは、その内容をその場で考えながら口述されたものを漢文体で筆記したために起こったものと考えられる。従って『往生論註』や『西方要決』のような引用の際に参照した文献を除くと、『逆修說法』の他には書写すべき具体的な資料はなかったと考えられる。

### 『選擇集』第二章と『逆修說法』

前章において『選擇集』第一章が『逆修說法』を中心的な資料として執筆されていたことを明らかにしたが、本章では続く第二章を見ていく。まず、『選擇集』第二章と対応する『逆修說法』の箇所をまとめておく。

#### 『選擇集』

①『觀經疏散善義』引文

#### 『逆修說法』

対応箇所なし

② 往生の行相を明かす 対応箇所なし

③ 正行を明かす 対応箇所なし

④ 難行を明かす 対応箇所なし

⑤ 二行の得失を明かす（五番相對） 「六七目」 2—4 專難二修の得失

（五番相對）（昭法全 二七二頁四行目）

⑥ 純難の義の証拠を明かす 対応箇所なし

⑦ 『往生礼讃』 引文 「六七目」 2—4—6 『往生礼讃』の義

（昭法全 二七三頁三行目）

⑧ 難を捨て專を修すことを明かす 対応箇所なし

『選擇集』第二章における『逆修說法』との対応箇所は、章の後半部分、つまり⑤「二行の得失を明かす」と⑦「『往生礼讃』引文」を述べる部分のみに限定できる。まず⑤「二行の得失を明かす」中で、「五番相對」における両者の対応を見ると、共に同じ『觀經疏』の文章を引用し、その前後の解説についても多少の文字の異同は有るものの、内容的には同一であると考えて差し支えない。また⑦「『往生礼讃』の引用」についても『逆修說法』では部分的に省略されている箇所もあるが、全体としては同じである。したがってこの後半部分は、既に指摘した『選擇集』第一章と同様、明らかに『逆修說法』との関連性を示唆している<sup>1)</sup>。

では『選擇集』のそれ以外の箇所、すなわち『逆修說法』と対応しない第二章の前半部分（①～④）はどのように成立したのであるうか。第二章の前半では、あらかじめ①の引用段に『觀經疏』を引用して

おきながら、続く私釈段（②～④）の中で解釈する際に、その内容に沿って必要な箇所を再度引用し直している。このような方法は『選擇集』の他の章には見られず、第二章前半の大きな特徴と言える。そこでこの私釈段に引用された『觀經疏』に重点をおきながら、第二章前半の成立の状況を見てみる。

まずは、引用段と私釈段の必要箇所の対照を挙げておく。

#### 〔引用段〕

（私釈段〈傍線引用文〉）

觀經疏第四云就行立信者

然行有二種一者正行二者難行

善導和尚意往生行雖多大分爲二一正行二難行

言正行者專依往生經行行者是名正行何者是也

一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等

第一讀誦正行者專讀誦觀經等也即文云一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等是也

一心專注思想觀察憶念彼國二報莊嚴

第二觀察正行者專觀察彼國依正二報也即文云一心專注思想觀察憶念彼國二報莊嚴是也

若禮即一心專禮彼佛

第三禮拜正行者專禮彌陀也即文云若禮即一心專禮彼佛是也

若口稱即一心專稱彼佛

第四稱名正行者專稱彌陀名號也即文云若口稱即一心專稱彼佛是也



例二 (十一丁裏一行目、二行目)

三、一心専念、殊勝、名うて、住坐、時、久、念、  
不捨、是、名、うて、殊、勝、故、是、也、次、

次に「一心専念の文」であるが、「廬山寺本」においては「不問」の文字が後の挿入となつてゐる。このミスも前述と同じように「行住坐臥に時節の久近を問わず」と口で言われ、それを筆記するからこそ文頭にくるはずの「不問」の文字を抜かしてしまうのであり、漢文を書写したのであればこのようなミスは起こらない。まして、「一心専念の文」という最も重要な文章をこのように間違ふには、訓読体から漢文体へという作業だからこそ起こり得た結果だと考えられる。

例三 (十二丁裏六行目)

三、童、不、違、具、述、

次に「具に述ぶるに違あらず」という部分であるが、「不」の文字で何らかの文字を書き直した痕跡を残している。この文字を詳細に見ると、「具」の文字を書き始めて、途中で「不」と改めたのではないかと推測される。つまりこの事例も「具に述ぶるに違あらず」と口述され、それを漢文体で記すからこそ起こり得た現象である。「具」と書き始めた時に「……違あらず」と言われて、慌てて書き直した

と考えられる。

例四 (十四丁表五行目)

案、此、父、意、付、二、難、二、行、

これは、「付」を「就」と書き直す訂正であるが、どちらの字も「ついて」と読むために起こつた間違いである。本来「就」と記すべき所を「付」と記したミスは漢字の間違いであり、他の文献を見ながら書写する時には絶対に起こらない現象である。他にも様々な書き込みが存在するが、これらの校正作業に共通して言えることは、その執筆時の状況が全て口述筆記であつたからこそ起こつた現象であると考えられる。しかも訓読みで口述されたものを漢文体で記す時に起こる現象なのである。

以上のことから考えて、「廬山寺本」第二章前半部分の執筆状況は「口述筆記」によるものであつたと考えられる。しかし、これらの書き込みは前半に集中しており、先に述べた後半の『逆修説法』と対応する部分に関しては、間違いによる訂正は無く、わずかに『観経疏』の引用を再確認した跡が見られるだけである。

では口述筆記された前半部分は、何を元に作られたのであろうか。先に述べた『逆修説法』の「二行の得失」を明かす部分の前には

然者依此經意今捨聖道入念佛也就其往生淨土亦其行是多依之善導

和尚立專雜二修判諸行勝劣得失給則此經疏云就行立信者然行有二種一正行二雜行云々專修彼正行云專修行者不修正行而修雜行申雜修者也<sup>9</sup>

という文章がある。この内容はまさしく「善導和尚、正雜二行を立て、雜行を捨て正行に歸す文」という第二章の章題であり、さらに「行に就いて信を立つとは、然るに行に二種有り。一に正行、二に雜行。」の部分は第二章の前半を意味する。すなわち『選擇集』と『逆修說法』が対応しないと思われた前半部分についても実際には前述の『逆修說法』の文章が元になっていたことが理解できる。そしてこれを元に『觀經疏』の引用を織り交ぜながら拡大することによって『選擇集』第二章の前半が著述された。このように考えると、章題、前半の「五種正行」、後半の「五番相對」、全てが『逆修說法』との関連において解き明かされたことが分かる。つまり第二章においても『逆修說法』が中心的資料となつてゐることが明らかになったが、ここでは、その元資料となる『逆修說法』に既に説かれてゐる内容についてはその多くを書写し、逆に未だ説かれてゐない内容については執筆時に考えながら口述筆記によつて記されてゐたのである。このことは第一章においても想定できたが、第二章はその状況がより顕著である。

### 『選擇集』第三章と『逆修說法』

これまでの考察によつて『選擇集』の執筆に『逆修說法』が深く関

与してゐたことは明かである。そこで、次には第三章についてこれと同様『逆修說法』との関連を見て行くが、「廬山寺本」の第一筆とされる安樂房との関わりについても検討していく。

「廬山寺本」第三章は、その半ばで筆跡が変わつてゐる。『勅修御傳』や『決疑鈔直牒』の伝承に依れば第一章からこの箇所までの筆が安樂房であり、この箇所から真觀房に交替されるのである。今、その箇所を「廬山寺本」によつて確認すると、

#### （二十八丁表）

彼佛因中立弘誓聞名念我惣迎來不簡貧窮將富貴不簡下智与高才不簡多聞持淨戒不簡破戒罪根深但使迴心多念佛能令瓦礫變成金（已上）問曰以念仏

為本願其義実可然未審其願已為成就將為未成就答曰其願已成就成仏以來於今十劫故無量壽經下卷願成就文云諸有

#### （二十八丁裏）

衆生聞其名字「号」信心歡喜乃至一念至心迴向願生彼國即得往生住不退轉（已上）又善導釈云彼仏今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生（已上）「加之往生礼讃云」

問曰一切菩薩雖立其願或有已成就亦有未成就未審法藏并四十八願已為成就將為未成就也答曰法藏



とあり、この中で実際に筆跡が変わっているのは、削除を指示した線で囲まれた文章の後からである。一般的に考えれば各章の終わりまでを筆の務めとするであろうから、何らかの理由で急遽交替を余儀なくされたことがわかる。

そこで、その理由を見出すべく、筆が交替する前後の文章を見てみると、

#### 削除された交替前の文章（安樂房執筆）

問曰以念佛為本願其義實可然未審其願已為成就將為未成就

答曰其願已成就成佛以來於今十劫故無量壽經下卷願成就文云諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心迴向願生彼國即得往生住不退轉已上又善導釋云彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生<sup>15</sup>

#### 交代後の文章（真觀房執筆）

問曰一切菩薩雖立其願或有已成就亦有未成就未審法藏 四十八願已為成就將為未成就也

答曰法藏誓願一々成就當知何者是也極樂界中既無三惡趣當知是即成就無三惡趣之願也以何得知即願成就文云亦無地獄餓鬼畜生諸難之趣是也又彼國人天壽終之後無更三惡趣當知是即成就不更惡趣之願也以何得知即願成就文云又彼 乃至成佛不更惡趣是也又極樂國人天既以無有一人不具三十二相好醜之別當知是即成就具三十二相願有好醜之願也以何得知即願成就文云生彼國者皆悉具足三十二相

是也如是初自無三惡趣願終至得三法忍願一々誓願皆以成就第十八念佛往生願豈孤以不成就乎然則念佛之人皆以往生以何得知即念佛願成就文云諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心迴向願生彼國即得往生住不退轉是也凡四十八願莊嚴淨土花池寶閣無非願力何於其中獨可疑惑念佛往生願乎加之一々願終云若不尔者不取正覺而阿彌陀成佛已來於今十劫成佛之誓既以成就當知一々之願不可虛設故善導云彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生（已上）<sup>16</sup>

削除すべき交替直前の文章では第十八願成就の問題だけの内容であったものが、交代後の文章では他の本願についても具体的に願成就の文を挙げるなどして、弥陀の四十八願の全体の成就を明かしている。このことから、削除された安樂房の筆である文章を詳しく書き直したものが、交代後の文章であると考えられる。そこで、これまでと同じように『逆修說法』との比較によってその原因を探っていく。まずは、第三章と『逆修說法』との対応を挙げておく。

#### 『選擇集』「廬山寺本」

#### 『逆修說法』

① 『無量壽經』 引文

該當箇所なし

② 『觀念法門』 引文

該當箇所なし

③ 『往生礼讃』 引文

該當箇所なし

④ 弥陀の本願興起を明かす

〔三七日〕 3-1 弥陀の因位の願<sup>17</sup>

⑤ 選擇の相を明かす

〔昭法全 二五一頁六行目〕  
〔三七日〕 3-1 弥陀の因位の願  
〔昭法全 二五一頁六行目〕

⑥ 本願の内容を明かす

〔三七日〕 3—1—1 無三惡趣の願

〔昭法全〕 二五一頁十三行目

〔三七日〕 3—1—2 不更惡趣の願

〔昭法全〕 二五一頁十三行目

〔三七日〕 3—1—3 悉皆金色の願

〔昭法全〕 二五一頁十五行目

〔三七日〕 3—1—4 無有好醜の願

〔昭法全〕 二五一頁十五行目

〔三七日〕 3—1—5 念仏往生の願

〔昭法全〕 二五一頁十五行目

〔三七日〕 3—1—6 來迎引撰の願

〔昭法全〕 二五一頁十五行目

〔三七日〕 3—1—7 係念定生の願

〔昭法全〕 二五一頁十五行目

⑦ 念佛が生因である理由

〔三七日〕 3—6 念佛を本願とする理由

〔昭法全〕 二五三頁二行目

〔三七日〕 3—6—1 殊勝の功德なるが故

〔昭法全〕 二五三頁三行目

〔三七日〕 3—6—2 修し易き故

〔昭法全〕 二五三頁五行目

〔三七日〕 3—7 本願の成就

〔昭法全〕 二五三頁十五行目

該当箇所なし

⑧ 第十八願の成就について

〔三七日〕 5—5 決定往生

〔昭法全〕 二六六頁十二行目

〔五七日〕 5—4 善導の釈

〔昭法全〕 二六六頁十行目

該当箇所なし

⑨ 十念について釈す

該当箇所なし

⑩ 乃至について釈す

該当箇所なし

⑪ 念佛往生の願の名を釈す

該当箇所なし

「廬山寺本」における第三章を全部で十三の項目に分け、それに対応する『逆修說法』の箇所を示した。この中で⑧が削除すべき線で囲まれた文章であり、そこまでが安樂房の筆である。そして⑨以降が真觀房の筆である。

引用段を除いて⑧までの安樂房の範囲に関しては、文章自体は違うものの『逆修說法』の「三七日」の内容と一致し、さらには『逆修說法』に説かれた順序と同じ順序で説かれている。このことから第三章においても、『逆修說法』「三七日」を参照しながら「廬山寺本」が作られていたことがわかる。しかし、筆が真觀房に変わってからは、⑩「第十八願の成就について」の文に關してのみ『逆修說法』の「五七日」に一致する箇所が見出せる。すなわち執筆交替を境に『逆修說法』との關係が變化するのである。

そこで、まずは『逆修說法』と対応する、執筆交替前後のいづれにも見られる⑧と⑩の「第十八願の成就について」明かす部分を比較してみる。

『選擇集』

『逆修說法』 対応箇所

⑧ 第十八願の成就について（削除） 交替前

〔三七日〕 3—7 本願の成就

問曰以念佛為本願其義實可然未審其願已為成就將為未成就

雖立如此誓願其願不成就者非正可憑然彼法藏菩薩願一々成就既成佛其中此念佛往生願成就文云諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心回向願生彼國即得往生住不退轉已上又善導釋云彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱

答曰其願已成就成佛以來於今十劫故無量壽經下卷願成就文云諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心回向願生彼國即得往生住不退轉已上又善導釋云彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱

乃至一念至心回向願生彼國即得往生住不退轉云々

念必得往生

⑩第十八願の成就について 交替後

第十八念佛往生願豈孤以不成就乎然則念佛之人皆以往生以何得知即念佛願成就文云諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念至心迴向願生彼國即得往生住不退轉是也凡四十八願莊嚴淨土花池寶閣無非願力其中獨不可疑念佛往生願極樂淨土若淨土者念佛往生亦決定往生也

「五七日」5—5 決定往生  
彼願成就文在此經下卷其文云諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念至心迴向願生彼國則得往生住不退轉云々凡四十八願莊嚴淨土花池寶閣無非願力其中獨不可疑念佛往生願極樂淨土若淨土者念佛往生亦決定往生也

加之「願終云若不尔者不取正覺而阿彌陀佛成佛已來於今十劫成佛之誓既以成就當知一々之願不可虛設故善導云彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生（已上）」

「五七日」5—4 善導の釈  
法藏菩薩立彼願兆載永劫間難行苦行積功累德既成佛給者昔誓願一々不可疑而善導和尚引此本願文曰若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生云々

このように、安樂房が記し後に削除された文は『逆修說法』の「三七日」3—7（本願の成就）の内容と一致し、真觀房執筆の第十八願成就の文章は「五七日」5—5（決定往生）と「五七日」5—4（善導の釈）の内容と一致する。この両者における『逆修說法』との内容的な共通を考えれば、それぞれの執筆の際に『逆修說法』が参照されていたことは明かである。しかし、その参照された『逆修說法』の内容が執筆交替の前後では「三七日」から「五七日」に変更されているのである。

さらに、『選擇集』第三章での執筆交代後の内容を見てみると、

⑪十念について釈す

⑫乃至について釈す

⑬念佛往生の願を定める

とあるように、全てが第十八「念佛往生の願」に関する内容である。つまり、⑩真觀房執筆の範囲に記された内容は、⑧交替前に安樂房が記した部分をより詳細に記したこととなる。

すなわち、はじめ安樂房が『逆修說法』の「三七日」に説かれた「本願成就」を明かす部分を筆記していたが、その内容を詳細に増広することとなり、参照していた資料を変更して『逆修說法』の「五七日」の内容が元になった。その際、『逆修說法』の内容だけでなく、第十八願について、そこに説かれる「十念」や「乃至」或いはその願名についても詳細に記されていたのである。この参照した『逆修說法』のわずかな内容を増広するという状況は、既に述べた第二章の前半にも見られた。それと同じならば、真觀房の範囲に関してはその殆どが執筆の時点で作られたと考えることもできる。そこで再度「廬山寺本」を見てみたい。

真觀房の筆の箇所には多くの訂正等の書き込みが見られる。その中でも注目すべきこととして、⑨「諸々の本願成就について」明かす部分には「無有好醜の願」と記していたものを「具三十二相の願」と訂正している箇所が見られる。

（原初形態）

又極樂國人天既以無好醜之別。當知、是即成就無有好醜之願也。

故願成就文云、生彼國者皆悉具足三十二相。

（訂正後）

又極樂人天既以無有一人不具三十二相。當知、是即成就具三十二相願也。以何得知、即願成就文云、生彼國者皆悉具足三十二相是也。<sup>(19)</sup>

原初形態の状況から見て、「廬山寺本」では初め第四「無有好醜の願」の成就について記そうとしていたに違いない。しかし、続く教証では「故に願成就の文に云う」として、『無量寿經』下巻の「彼の国に生ずるものは、皆悉く三十二相を具足す」という文章を挙げているのである。それぞれの願と願成就の文の対応が文献に明確に示されるのは、筆者の知る限り了慧の『無量寿經鈔』を待たねばならない。『選擇集』執筆時に第四「無有好醜の願」の成就を明かすつもりで記していたが、それに対応する願成就の文を即座に確定する資料が手元になかったのではなからうか。第三章前半の本願を明かす部分では第一・第二・第三・第四、乃至、第十八の願という順で記されているのであるから、この願成就を明かす部分でも、本来それに即して第一・第二・第三・第四と進むべきである。にもかかわらず、第三願の成就を抜かし、第四願を訂正して、第十八願を飛び越した第二十一願を挙げる状況には何らかの理由があるはずである。おそらく、突然の執筆交替から考えると第三願成就の文を俄に確定する資料もなく、第四願成就の文を記そうとしたが判然とせず、結果、最も分かりやすい第二

十一「具三十二相の願」の成就に書き換えたと思われる。この箇所では、

如是初自無三惡趣願終至得三法忍願一々誓願皆以成就<sup>(20)</sup>

というように、ここでは弥陀の四十八願の全体が成就されたことを示すのが本意であり、一々の願の成就の具体性にこだわる必要はなかったのである。いずれにせよこの箇所に関して内容的に参照したような文献は無く『選擇集』撰述時に俄に考えられた文章であることになる。すなわち第三章での真觀房の筆の範囲は、『逆修說法』の「五七日」を元として、更に詳細な内容を考えながら記されたのである。ただ、前述した第二章の状況と違うことは、「觀經疏」を織り交ぜながら」という単純な作業ではなく、第十八願という短い文章に対して、その語義解釈を詳細に行っており、考えながら執筆しなければならぬ箇所が非常に多い事である。

以上の考察によって『選擇集』執筆時に『逆修說法』が参照されていたことは明らかにしたが、第一章が「六七日」と「初七日」、第二章は「六七日」、第三章は「三七日」に対応することを考えると、『選擇集』の構成そのものは、当然『逆修說法』の構成を元としたものではなく、別のコンセプトで成立したものである。『選擇集』各章の内容や全体の構成はかなり整えられたものであり、法然の遺文の中でも最も完成されたものである。おそらくは『選擇集』執筆の起因と

なった兼実の要請や当時の他宗への配慮も含めた上での構成と考えられる。法然は自分の考えたこの構成に従って、まず、以前自分が話した内容である『逆修説法』を元に、真観房を中心とした幾人かの弟子達にまとめ直させたのであろう。少なくとも今回本稿が扱った『逆修説法』と最も対応する第三章までが安楽房の筆であるという事実、中でも『逆修説法』に対応しない部分では口説を筆記した痕跡、更には第三章後半に至って『逆修説法』の支持が無くなると真観房に筆が替わることを考えると、まず、『逆修説法』が父親の法会であり、他のどの弟子達よりも身近なものである安楽房が第一筆に選ばれ、『逆修説法』との対応が無くなるにつれ、その任を解かれたと考えられる。第一章や第二章において執筆時に創作されたであろう箇所には、必ず口述筆記された痕跡を残していたにもかかわらず、第三章後半の真観房の範囲に関してはそのような跡は見出せない。真観房の範囲に見られる多くの書き込みは、全て文章の挿入や書き換え等の訂正であり、第一章や第二章で見たような口述筆記の状況を表す書き間違いではない。このことは少なくとも安楽房の範囲に存在していた口述者が真観房の範囲ではないことを意味する。突然の交替という状況を考え合わせると、安楽房は真観房の口述を筆記していたが、後半では真観房自身が筆を取り始めたという状況を考えるのが最も合理的であろう。しかしながらこのことは定説となっている『選擇集』の執筆状況とは別の状況を想定しなければならず、真観房の筆の範囲全体、すなわち第三章後半から第十二章、及び第十六章を考察した上で改めて論じなければならぬ大きな問題だと考える。

#### 注

- (1) 湯山明「仏教文献学の方法試論」、『水野弘元博士米寿記念論集パリ文化学の世界』、平成二年六月、春秋社 参照。
- (2) 現存の『逆修説法』諸本は、全て逆修法会そのものの記録としてではなく、後の時代に書物としてまとめられたものである。したがって現状では『逆修説法』の原初形態として扱うことができる文献は存在しない。現存する資料の中で最も信頼できる古本系の『逆修説法』を資料として用いることとする。
- (3) 拙稿「廬山寺蔵『選択集』の草稿的位置づけをめぐる」、『佛教文化研究』第四十二・四十三合併号、平成十年九月、浄土宗教学院 参照。
- (4) 資料の中で『逆修説法』の箇所には、現存する古本系の『逆修説法』をもとに科段に分け、その科段の番号と項目名を挙げておく。また、便宜上「昭和重修法然上人全集」(石井教道篇、昭和三十年三月、平楽寺 書店。)の頁数及び行数を明記しておく。尚、以下の第二章、第三章においても同じ方法で作成した資料を挙げる。
- (5) 『昭法全』二七〇頁十二行目。
- (6) 『昭法全』二七〇頁十四行目。
- (7) 現存『逆修説法』ではこの間に「浄土門」について記された部分が一行存在する。しかし、他の内容的な一致を考慮すれば、『逆修説法』を逐一書き写すのではなく、必要箇所のみを書き写していたと考えられる。
- (8) 見え消された文章と、続く「次往生浄土」の間には先に見え消しをおこなったであろうことを示唆するわずかなスペースが存在する。このことから考えると、「廬山寺本」執筆時に参照したものの間違いを踏襲して後に訂正したのではなく、執筆の時点で初めて起こった間違いであることを示している。
- (9) わずかに見られる書き込みを見ると、第九丁裏一行目に「三乗者即是聖道門意也浄土者即是浄土門(○意)也」とあり「意」が後から挿入されている。「聖道門」には「意」が記されていることから、そちら

に統一したのであろう。そこでこの文章と対応する『逆修說法』を見てみると、「此中三乗者即聖道門也淨土即淨土門也」とあり「意」の文字は伝承されていない。「廬山寺本」執筆時に『逆修說法』を参照し、『選擇集』には「意」を含んだ文章として記すつもりであったが、その参照した資料につられて「意」を抜かしてしまったと考えざるを得ない。少なくともこのミスは文章の体裁を整えるために書き換えられたものであることに違いない。

- (10) 「廬山寺本」第一章において、『逆修說法』と対応しない箇所の中には、『往生論註』や『西方要決』といった法然の著作以外の引用がみられるが、その部分に関しては「廬山寺本」に送りがない、返り点等が無いこととから考えると、おそらくは原典から引用されたであろうからここでの考察には含まない。

- (11) ⑥「純雑の義の証拠を明かす」部分は、内容的に『選擇集』全体に見られる「他宗への配慮」としての文章であると考えられ、⑧「雑を捨て専を修することを明かす」部分は「まとめ」の文章であり、比較の対照としない。

- (12) 「五番相對」の第三無間有間對を明かす部分に『觀經疏』の引用に関する書き込みが見られる。「廬山寺本」では始め「故云若後雜即心常間斷」と記していたものを、後に「若後雜即」を削除して、「心常間斷」のみを残している。削除している部分を詳細に見ると、「行」の字を挿入したり、「若」や「雜」の文字を見せ消ちで消したりと、何度か手が加えられていることが分かる。さらに同じ箇所では一度挿入した後に、塗りつぶして削除しているものが二カ所みられるが、かすかに残るルビの状況から「疏ノ上ノ文二」と記そうとしたことが推測され、執筆時点で未だ訂正を加えるべき要素があったことが伺える。しかし、いづれの訂正にしても『觀經疏』の引用に関してであり、『觀經疏』の引用に関する部分のみ、原点から再確認したことによってなされた書き込みであると考えられる。

- (13) 『昭法全』二七二頁四行目。

- (14) 『法然上人行狀畫圖』卷第十一（井川定慶篇『法然上人伝全集』、四

九五〇頁）。『決疑鈔直牒』（『浄全』七卷、五四七上、八〇十五行目）。

- (15) 「廬山寺本」二十八丁表四行目～二十八丁裏四行目。

- (16) 「廬山寺本」二十八丁裏五行目～三十丁表七行目。

- (17) この箇所の「無量寿經」の引用は「五七日」5-3「弥陀の選択を明かす」部分にも一部略して繰り返される。

- (18) 『逆修說法』当時の状況を考えるならば、「三七日」において説かれた内容を「五七日」に再度詳しい形で説法されたことになり、説法者である法然は共に同じ資料に基づいているはずである。しかしながら、「三七日」「五七日」両者の内容を「廬山寺本」が伝承していることを考えるならば、執筆時には既に『逆修說法』の筆録を参照していたことになり、法然が『逆修說法』をした元の資料に基づいているとは考えられない。

- (19) 「廬山寺本」二十九丁表六行目～二十九丁裏二行目。

- (20) 「廬山寺本」二十九丁裏二行目～四行目。

（かねいわ かずひろ 文学研究科仏教学専攻博士後期課程）

一九九九年十月十五日受理